

子どもにとって楽しい
音楽リズムのあり方を考える (3)

原口 純子

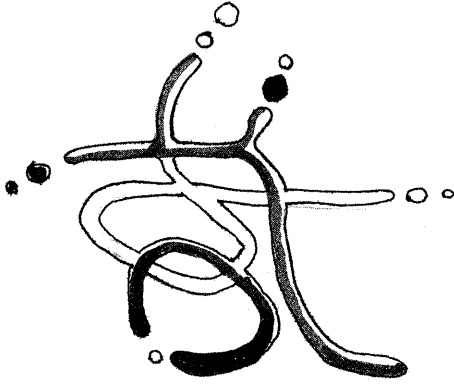
3、わらべうた

(1) 種類と傾向

今日幼稚園で用いられているわらべうたは、次の三つの流れがある。

(ア) 古来、日本で伝統的に歌いつがれていて、保育者自身が子どものころからなじんできたもの。(例・かごめかごめ・花いちもんめ)

(イ) コダーイ芸術研究所によるコダーイシステムのわらべ



うた。(例・どんどんばし・つるつる・ひもろ)

(ウ) ヨーロッパからはいったわらべうた。(例・ロンドン橋・キャベツを植えよう等)

保育の中で使用頻度の最も多いのが、伝統的わらべうたである。四月から三月までおこなわれる。コダーイシステムのわらべうたも三年間研修を受けてみたが、同じ日本のわらべうたでありながらどうしても身につかず、自分のものとして使い切れなかった。わらべうたは譜を見ず耳だけをたよりにおぼえるため、大人になって習ったものは身につくかと思われる。ヨーロッパから入ったわらべうた、例えばロンドン橋などは、保育者自身子どもの時代からなじんでいること、又新しいものは楽譜を見て練習できる点でかえって身につけやすいとも言える。

(2) 事例と考察

事例9の1 わらべうた「かごめかごめ」の発達に見られる変化 年少 4月

なにも遊ぶものが見つからず不安そうな女兒三人を

さそって手をつなぐ、それを見ていた女兒三人がよって来たがなかなか知らない人と手をつなげずにいる。そこで教師が言葉がけをして手をつなぐようにうながす。手をつなぐことによって不安そうだった表情が安定した。手をにぎり返したり、顔を見合せたりの動作が見られる。「かごめかごめ」を教師が歌うと丸くなくて手をつないで歩くことができる。「うしろの正面だあれ」になると友だちの名前を知らないで困ってしまう。うしろに当たった子どもは名前を呼ばれるのを待っている。教師が助けて次の鬼を決めてまた始まる。

△考察▽

1、入園当初の不安定な時期は、教師や友だちと手をつなぎ、わらべうたのリズムに合わせて歌ったり、歩いたりするだけで十分楽しく、「みんなと一緒」という安定感が生まれたり、友だちに興味を持つきっかけになる。

2、四月五月の友だちの名前もよく知らないうちの「か

「ごめかごめ」は鬼が交代できるような教師の助言や配慮が必要である。ルールを変えて目をあけて、他の人にタッチして交代する方法でもよい。

事例9の2 わらべうた「かごめかごめ」の発達に見られる変化 年少 9月

気の合った女兒六人が集まって園庭で「かごめ」を始める。「うしろの正面だあれ」では声だけで友だちの名前を当てることができる。遊びを自分たちで変形させて、「うしろの正面だあれ」のところで鬼がまたの下から頭を下げて友だちのくつを見て名前を当てるゲームにして遊んでいる。

△考察▽ 四月の段階では、友だちと手をつないで歩くだけでうれしかったのが、九月では、友だちの声を聞いてあてることがおもしろくなり、「かごめ」の楽しさの質が変わってきている。

事例10 わらべうたのおもしろさ 「あぶくたったにえ たった」 年長 11月

七人の女兒が園庭で「あぶくたった」をしている。

「あーぶくたったにえ たった、にえ たかどうだか食べてみよムシャムシャ もう煮えた、戸棚にしまつて鍵をかけて、ガチャガチャ」：「トントントン」「何の音?」「ブランコのゆれた音」「あーよかった」：「おぼけの音」キーンツ逃げる、鬼は友だちを追いかけ、つかまえて鬼交代をして何度もくり返す。

△考察▽

1、年少から年長まで季節を問わずくり返される遊びである。この遊びが好まれるのは、日常生活に合った歌と動作の楽しさである。歯をみがいてシュッシュジュ オおろに入つてゴシゴシゴシといった動作がリズムカルで、又それぞれに自分のイメージをもつて動ける。みんなが知っていて安心して参加できる遊びである。

2、かけ合いのおもしろさ。鬼と子どもとの歌のかけ合いのおもしろさがある。

3、「トントントン」「何の音?」のところで鬼になった子どもは自分で考えて「赤ちゃんの泣く音」とか「木

の葉のゆれる音」など考えたり、工夫する余地のあることが、この遊びを一層たのしいものになっている。

4、ゲームとしての要素。おにごっこになっているため、走る、追いかける、にげる、などのゲームとしてのおもしろさがある。しかし鬼になりたくてうろうろとにげない子どもが次第にでてくるために、年少時に於ては教師が介入して指導する必要がある。

事例11 ごっこの中にとり込まれるわらべうた 「だいくさんのかなづち」(注3) 年少 11月

男児七人が家族ごっこで、大きなダンボールを用いて家づくりをして遊んでいる。一軒建つごとに「だいくさんのかなづち」を歌い、お祝いをする。ねこの家が建った時は普通に歌っていたが、ベガサスの家が建った時は急に速度を早めて歌ったり「四つのかなづちでやろう！」とかなづちの本数を増やしている。おなか、おしり、背中などをかなづちにして遊んでいる。

△考察▽ 西洋わらべうたのグループであるが、メロディーが単純でおぼえやすく、自分の体の腕や足、ひ

ざ、鼻などをかなづちにして「トントン」とするところがおもしろく好まれている。ごく普通のごっこ遊びの中にとりいれられて、自発的に歌ったり動作している。

歌、動作、遊戯、ゲーム、表現、ことは遊び、等々さまざまな要素が入ったわらべうたは、子どもにとって最も自然で自由に楽しめる活動である。

4 手あそび

(1) 種類と傾向

手あそびといわれるものの中にも指あそび(例 チビチャン・デカチャン、10人のインディアン)に属するものと腕から上半身を使う遊び(例 お弁当箱のうた、げんこつ山、小さな畑、むすんでひらいて、チュアリーッブ)とがある。

手あそびは一年を通じて、主として集合した保育の場で教師主導におこなわれる場合が多い。教師と子どもが対面してピアノを用いず、生の声で歌いかけ、手を動か

しながら、子どもの表情を見ることができると、子どもを教師の方に注目させるには便利な方法である。手あそび歌が、他のわらべうたことなるのは、場を移動しないこと、立ったまま、又は、すわったまま手や体を動かして歌いながら動作するところにある。

(2) 事例と考察

事例12 四月入園当初の手あそび 「むすんでひらいて」 年少 4月

降園の前30分 イスを丸く置き、全員の顔が見えるようにすわり、教師も輪の中に入りイスにかける。教師は子どもの顔を見ながら「むすんでひらいて」を手をうごかしながら歌う、子どもたちもいっしょに歌いながら手を打ったり、開いたり動作をつけている。

△考察▽ 子どもにとってはいっしょとして動かずに歌うよりは手を動かしながら歌う方が楽しくうたえる。四月に歌っているのはこの他に「手をたたきましょ」「チューリップ」等手あそびがいっしょになっている歌が多いことに気づく、実態に合わせて自ずからそのよう

に計画されていることがわかる。

事例13 子どもの注意を教師にひきつける 「いちじくにんじん」(注4) 年少 10月

クラスの子ども全員を集合させて、次に教師が話しを始めようとする時、子ども同士でガヤガヤと勝手におしゃべりをしている。教師が子どもの方に向かってごく普通の声で、「いちじくにんじん……」と歌いながら動作を始めると、しだいに教師の声に気づいて自然に静かになり、子どもも手あそびを始める。教師は子どもに「静かに」と言わず、言葉をはっきり発音しながらリズムカルに歌う。

△考察▽ 子どもが教師の指示により意図的に集合している場面で、かなりうるさい状況にあっても、教師が子どもの前に立って、手あそびを始めると、たいていの場合子どもはしだいに静まり、教師のペースのつて歌ったり遊んだりし始める。従って手あそびは、子どもの注目や集中を集める手段としては、非常に有効である。しかしこのことが逆に、子どもが興味もない

活動に、教師が一方的に子どもを強引に引きつけるための手段として用いられるケースも多い。

手あそびは、教師主導型の保育の中で用いられることが多く、子ども同士が子どもだけで手あそびをたのしむということは少ない。ほとんど何の道具もなしに、歌いながら、手や体を使って遊べるということは、その事自体とてきなことである。目的の手段や道具としてでなく、もっと自由な遊びの中で、少

人数の子どもの中で、先生といっしょに手あそびをして遊んでよいのではないか。

子どもに「静かにしなさい!!」とか「お話しやめ!!」「お口にチャック!!」などというよりは、おだやかにうたいながら、自然に気持が集中するやり方も、子どもの心の流れにそったものとも言える。手あそびは幼稚園的な活動である。

(注3) 「だいくさんのかなづち」 世界のあそび歌40 音楽の友社

(注4) 「こどもたちへのおくりもの」 うたあそび、第1集 日本レク協会 遊戯社

——つづく——
(つくば市立桜南幼稚園)